伝説の
Legendary technology
テクノロジー
53

甲州印伝

鹿革と漆が綾なす伝統美

鹿革に漆を載せる伝統技法で
財布や小物入れなどをつくる甲州印伝。
江戸時代からこの技法を守り続けてきた印傳屋 上原勇七は、
一方では海外ブランドとコラボするなど、
革新による美も追求し続けている。

藁と松やにを使う燻技法

窯の焚口に藁束を入れ、火をつけると、窯の上部に設けられた口から白い煙がもくもくと立ち昇る。その煙が直径１メートルほどの木製の筒に巻き付けられた鹿革を燻す。職人は煙が均等に鹿革にあたるように注意深く筒を回転させながら左右に動かす。やがて職人が新聞紙にくるんだ松やにを焚口に入れると、煙の色がやや濃くなる。１回30分ほどのこの作業を10回前後繰り返すと、最初は白に近い色だった鹿革が褐色に変化する。これが、印傳屋 上原勇七が受け継ぐ燻と呼ばれる伝統技法だ。燻るときに鹿革に糸を巻き付けたり、型紙を使って糊置きし柄を付けることもある。

「甲府印伝商工業協同組合の組合員は現在４社ですが、燻の技法を用いているのは私たちだけです」

そう言うのは、印傳屋 上原勇七の上原重樹社長だ。

この技法を使った商品は、半年から１年くらいの間は燻の香りが残る。この技法は非常に手間がかかるため、客から要望のあったオーダー品にしか施されない。商品全体から見れば数パーセント程度。価格も通常の商品よりは数倍高い。それでも根強い人気があるという。

江戸期に考案された漆技法

鹿や羊の革をなめしたものを印伝という。諸説あるようだが、もともとはインドから伝わったものなので、この名が付いたとも言われている。ただ、甲州印伝の場合、鹿革に漆を載せるのが特徴だ。1582（天正10）年に創業した印傳屋の遠祖である上原勇七が江戸期に考案した技法とされる。もちろん海外には、鹿革に漆を載せる技法などない。インドから輸入された鹿革が伝来し、日本で独自の発展をし、日本独特の文化として花開いたのが甲州印伝というわけだ。1987年には、経済産業大臣指定伝統的工芸品に指定されている。

「鹿革を保護するためと装飾性を高めるために漆が使われるようになったと聞いています。漆が定着しやすくなるように、鹿革がスウェードのようになるよう加工しています」

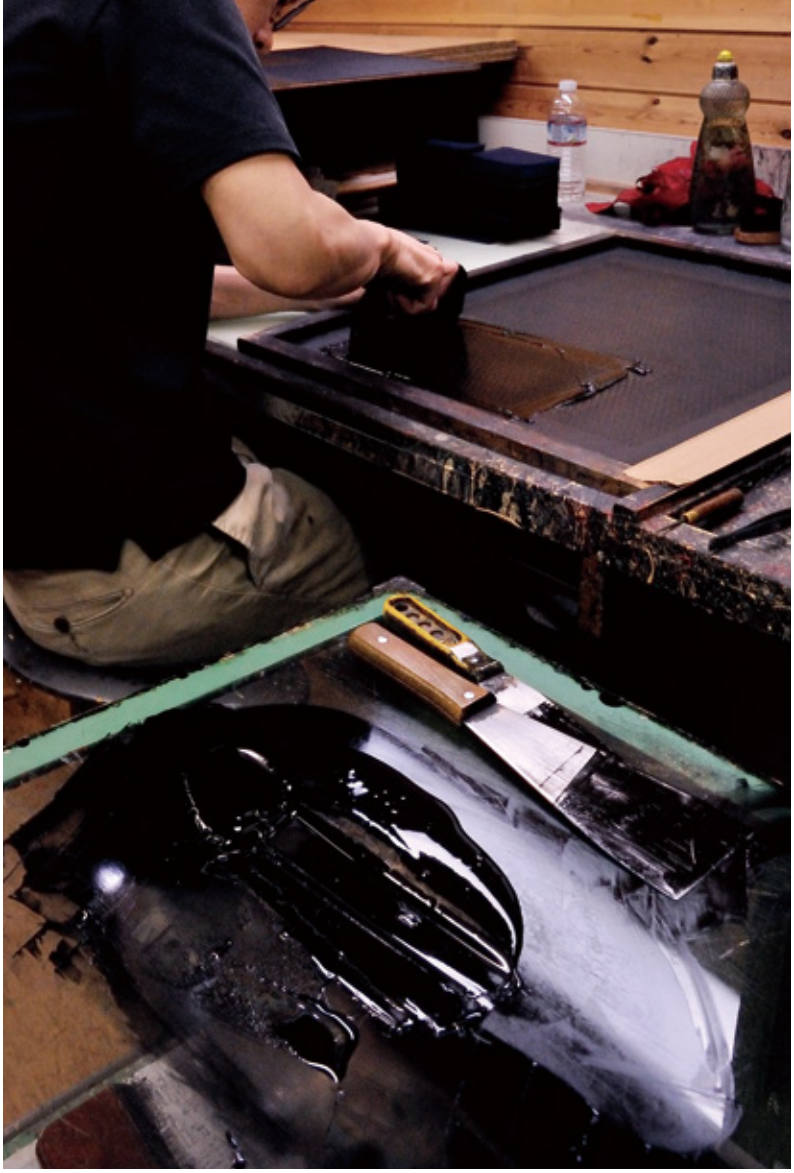
そう語る上原さんによれば、燻と漆、そして更紗が甲州印伝を支える３つの伝統技法だ。

更紗というのは、インド伝来の更紗模様に似ていることからこう呼ばれるようになったもので、ひと色ごとに型紙を変えながら顔料で色を重ねていく技法だ。漆付けをする前に用いられることが多い。最も多いときは６つの色を重ねるという。

甲州印伝はこうした伝統技法をベースに、分業制でつくられている。漆は漆、燻は燻とそれぞれの工程に専門特化した職人がいる。中には２つ以上の技法を身に付けたユーティリティの職人もいるが、基本はあくまでも分業制だ。どの工程の技法も

燻を担当するのはこの道20数年の神宮寺秀哉さん。丁寧にムラなく燻すのに1日以上はかかる。自然な色に仕上がるのは熟練の職人のなせる技だ。

82名いる社員のうち職人は45名。一番の若手は30代後半で、ものづくりがしたいと転職組が多いという。作業中はピンと張り詰めた空気だったが、上原重樹社長（前列中央）を囲んだ撮影には笑顔で応じてくれた。



写真左は、燻をする前に行う焼き擦りをするために鹿革を張ったところ。張られた鹿革の表面を焼ごてで整えていく。

奥が深く難しい。社長である上原さんは若いときに一通りすべての工程を体験したという。その体験を踏まえて上原さんはこう言う。

「３つの伝統技法以外にも例えば裁断という工程があります。鹿革は天然のものですから、角によってついた傷ですとか虫食いなどもあります。そうしたところをよけて、いかにより広く面積を取れるようにするか、何の商品に使うかを想定しながら裁断しなければならず、この工程にも熟練が必要です。各工程の職人はそれぞれ誇りを持って仕事に取り組んでいます。でも全工程を一通り体験した者としては、やはり漆がいちばん難しかったという印象です」

しなやかで立体的な手触り感

一見すると、それほど難しい作業には見えないかもしれない。けれども漆は粘着性が強いので、ヘラを使ってきれいにのばすだけでも力とコツがいる。鹿革の上に型紙を置き、ヘラで押しのばすようにして漆を載せていくのだが、特に大きな面の鹿革に漆を載せるときはヘラも大きいものを使うため、平均的にバランスよく漆を載せるのは至難の業。個人差はあろうが、上原さんによれば一人前になるには最低でも5年は要するという。

実際に手に取ってみればわかるが、模様が浮き出るように漆を載せているので、甲州印伝の品には手触りに立体感がある。漆が立体的に載らないと、独特の光沢が出ず、商品にはできないという。実に繊細で奥が深いのである。

こうしてつくられた甲州印伝の品は、どれも美しく、存在感がある。しかも使い込めば使い込むほど革が柔らかくなっていき、手触りも滑らかになっていく。甲州印伝の品は伝統工芸品であると同時に、財布や巾着、手提げなど実用品でもある。実際に使ってこその価値がある。もちろん使い方にもよるが、丁寧に使えば親から子、子から孫へと３代にわたって使い続けることも可能だという。しかも印傳屋では、自社製品に関しては修理にも対応している。誇りを持ってつくった商品を、長く使ってほしいからであろう。

門外不出の口伝を改めた理由

一方で印傳屋はティファニー社やグッチ社など海外有名ブランドとの

柄にも意味があり、トンボは前にしか進まないことから、勝負ごとに縁起の良い柄。写真右の瓢箪柄は、種子が多いことから子孫繁栄を意味する。

コラボも行っている。2017年には英国王室御用達の老舗ブランドであるアスプレイ社のクリエーション・コラボレーション・パートナーにも選定されている。また、シンプルな市松模様を基調にした「イルミナ」、ベージュ系の更紗と黒漆で立体的に表現した「ペルモネ」など独自のブランドも10以上立ち上げている。毎年９月には新しいシリーズの製品も発表する。江戸期から続く伝統技法を堅持しながら、つねに革新もしているのである。

そうした印傳屋の商品は、有名百貨店などにも置かれているが、甲府本店のほかに青山（東京）、心斎橋（大阪）、御園（愛知）にも直営店がある。「お客さまの声を直接お聞きできるのが直営店のいいところです。ときにはお叱りを受けることもありますが、そうした声が必ず次の商品づくりに生かされます」と上原さん。

直営店では、ショウケースに並べられた商品以外にも大量の商品が在庫として用意されている。客が気になった商品を言うと、店員が奥から箱を持ってくる。その中には同じデザインの色違いの商品がたくさん入っている。その中から本当に気に入ったものを客に選んでもらう。印傳屋はそうした伝統的な商売のやり方も大事にしている。ちなみに甲府本店の２階には「印傳博物館」があり、甲州印伝および鹿革にちなんだ貴重な収蔵品が展示されている。文化の担い手としての矜持がこんなところにも表れている。

この印傳屋の当主は代々、上原勇七の名を受け継いできた。燻など印傳屋に伝わる技法は門外不出で代々、口伝で当主だけに受け継がれてきた。しかし上原さんの父親の代のとき「家督を継ぐ者だけしか知らないのでは産業として細いものになってしまう」として、口伝の伝統は改められた。ただ、上原勇七の名を継ぐ伝統は今も守られている。

実は今年の１月、13代目の上原勇七さん（上原重樹さんの父親）が亡くなり、今度は上原さんが勇七の名を継ぐことになっている。単なる屋号ではなく、戸籍の名前も変更する。

こうして上原勇七の名前、伝統技法、伝統工芸品をつくる誇り、そして文化を担う矜持が、次の世代、次の時代へと受け継がれていくのである。

うえはら・しげき　1960年生まれ。大学卒業後、社会勉強と語学のために2年間渡米。帰国後、印傳屋に入社した。1582年から続く上原勇七の14代目をいずれ襲名する予定。